

鯉のぼりの話

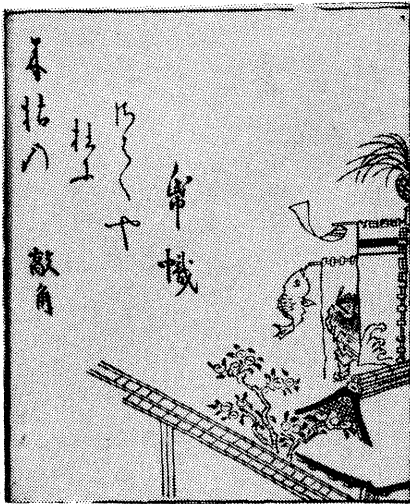
詩人の故土井晩翠氏が發起して、国際友好鯉のぼりの会というのを起こし、YMCAを通じて各国の青年たちへ鯉のぼりを贈って国際友好の一助とする催しは戦前から三十余年続いているが、この会が外国へ鯉のぼりを贈る時の説明は「鯉は激流とたたかって上流へ泳ぎつく。鯉のぼりは、すなわち正義と忍耐のシンボルである」となっている。まこと国際的な明快で気の利いた解説である。

五月節句にさまざまのぼりを立てることは古くから文献絵画が遺っているが、鯉の形ののぼりができたのはいつごろであろうか。

安永年間（1772）の川柳に、「五月雨が晴れる

山田徳兵衛

と鯉のたけのぼり」というのがある。たけのぼりは、滝登りと竹竿を登るのをかけた洒落であろう。以前は鯉の



一本立ちになる前の鯉のぼり
「俳諧続清鉤」 延享2年刊

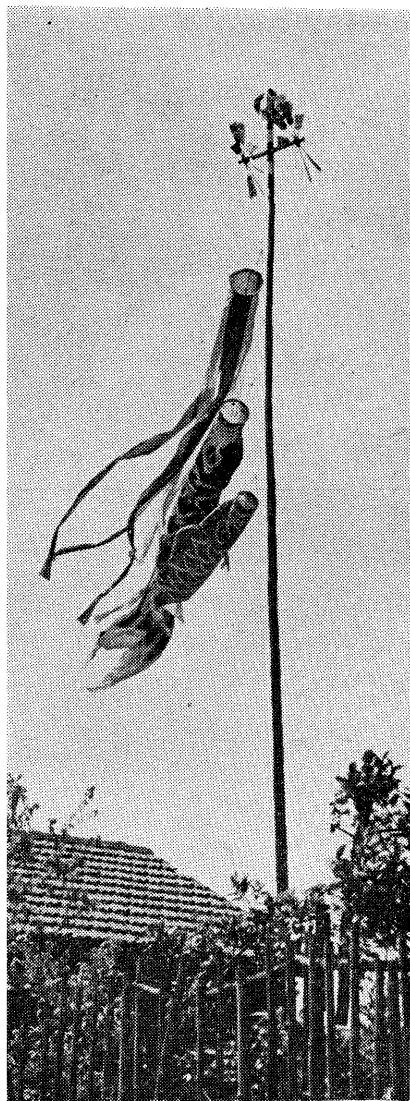
ぼりは紙製であったから、雨の降るたびに揚げたり降ろしたりしたものである。この川柳によって、このころすでに鯉のぼりのあったことがわかる。それより三十余年前の延享年間の絵を見ると、鯉のぼりは三十センチぐらいの小さいものを大きなぼりの附属に取りつけているから、そのころはまだ独立した大きな鯉のぼりはなかったらしい。誰が考えたか、風をはらむと泳いでいるようになびいておもしろいので、だんだん大きいのを作るようになったのであろう。

それと鯉という魚は見た眼も男性的なうつくしきがあるし、中国の登龍門とうりゅうもんのめでたい故事もあるので歓迎さ

れたのであろう。登龍門の故事とは、中国の黄河の上流、龍門という急流を泳ぎ登った鯉は龍と化すというめでたい伝説がある。龍というのは、中国では最高至上を意味するのである。日本流にいうと鯉の滝登りというわけである。

江戸時代の末ごろには、鯉のぼりはますます流行し、広重の風景画など見ると江戸市中では林立という言葉があてはまるほどに立ちならんでいる。

水を泳ぐ鯉を大空になびかせて男子の出生を祝うという風習は、なかなか雄大な洒落であって、おもしろく、外人はみんなその奇抜さに拍手する。



「空高く流れる鯉」中村末一郎氏撮影